

## 『人間の証明』

2024年07月15日

「東京新聞」に、本の大きな広告が掲載されていた。KADOKAWA 会長などを歴任し、現在、角川文庫振興財団名誉会長の角川歴彦（つぐひこ）氏が著した『人間の証明 勾留 226 日と私の生存権について』の広告である。次のような言葉が書かれている。「東京五輪汚職疑惑を巡る突然の逮捕から起訴、勾留、保釈に至るまで、私の基本的人権は侵害され続けた」、「渾身の手記 緊急出版!日米同時発売」、「憲法と国連に訴えよう これが私の最後の闘いだ」「この国はいつまで『人権後進国』なのか?」、「終わらせよう人質司法」など。130 頁ほどの小さな本であるが、著名な数名の作家、文化人が人質司法の人権侵害を怒り、勾留生活を明らかに著した角川氏に対する賛辞をもって推薦している。

角川氏の容疑は「東京五輪汚職」と呼ばれた贈収賄事件であった。KADOKAWA が五輪のスポンサーに選定されるように、組織委員会の高橋治之氏の知人が経営する会社にコンサルタント料名目で七千万円を支払った嫌疑で、事情聴取を受けることから始まった。外務省の対ロシア交渉の専門家であった佐藤優氏は東京地検特捜部の国策捜査により逮捕された経験から「特捜部は角川会長を逮捕すると思います。これは『人質司法』になりますよ」と、角川氏に伝え、「メディアに何も話してはいけない」と忠告していた。角川氏は、金の譲渡などは知らず、部下の不正もないと信じていると、潔白を表明し続けた。ところが、四度目の呼び出しを受けたホテルで、突然「逮捕します」と手錠をかけられ、腰に縄を付けられた。拘置所に連行され、裸にさせられ、体の隅々まで調べられる。自尊心を奪う身体検査であった。それから、検事の連日にわたる取り調べを受ける。検事は「あなたを贈収賄の共同謀議で起訴します」と告げ、看守からは「これからあなたを囚人として扱います」と言われた。三畳ほどの「単独室」に入れられ、外界との遮断、丸見えの便器、24 時間の監視など耐え難い人権侵害を経験した。角川氏は、持病があり、常用する薬が必要であったが、薬を与えられることはなく、度々倒れ、気を失い、命の危機を感じた。15 キロも痩せ、緊急入院も経験している。拘置所の医者から「角川さん、あなたは生きている間にはここからは出られませんよ。死なないと出られないんです」と言われた。保釈を要求しても、検事の作った書類に「同意」しないと認められない。厳しい取り調べに耐えかね、心ならずも「同意書」に印を押す被疑者は多く、それに基づき、検察は罪状を練り上げ、裁判で有罪になるケースが「冤罪」を作り出していることは周知の事実である。彼らの公権力は絶大である。長い拘束が「拘禁症状」を生む。袴田巖氏は生涯の苦しみを負った。「疑わしきは被告の利益に」という言葉があるが、実態は、被疑者になると人権は全く顧みられない。角川氏も社会的身分も全て剥奪され、ただ以下の人になってしまった。しかし、書類に同意の印を押さなかった。佐藤氏は『国家の罫』で、人質司法の苦悩から逃れるために読書に専念したと書いている。角川氏も熱心に読書をし、弁護士と妻の訪問と差し入れが支えであったようだ。四回目の保釈請求の時、根幹となる共謀と賄賂の認識には「不同意」したが、その他の多くの部分に「同意」し、ようやく保釈されたが、調書に拇印を押したことは不本意で、無念であったと書いている。角川氏は、226 日間、身体拘束され、生存を脅かされた人質司法での著しい人権侵害の苦痛に怒り心頭である。五輪の贈収賄の裁判とは関わりなく、保釈請求を却下し、不当に身体拘束することは憲法に違反すると、2.2 億円の国家賠償を求めて東京地裁に提訴した。日本の「人質司法」は国際的な人権意識からも極端に低く、角川氏の提訴に賛同、支援の輪が広がっている。評論家の保阪正康氏は「80 歳にして新たな戦いに挑む出版人の『人権宣言』だ」と評している。